ウィトゲンシュタインの
テクストを手元に引き寄せる②

2023年3月8日 @東北大学自主勉強会, via Zoom

槇野沙央理（morerain19@gmail.com）

【再掲】自己紹介

- 槇野 沙央理（まきの さおり）
- 所属：大正大学等非常勤講師
- 専門：ウィトゲンシュタイン
- 博論タイトル：「自己明晰化としてのウィトゲンシュタイン哲学 : 治療的解釈を超えて」
- 最近思うこと：テクスト解釈の範囲ではやりたいことができない気がしています

【再掲】配布資料と文献表の案内

- 資料は、槇野のウェブサイトにて配布しています。
- 「2023年 東北大学自主勉強会 特設ページ」
- https://saorimakino.weebly.com/2648121271228232339833258200272119324375202 50.html

【再掲】場の安全性について

- ミスジェンダリングを避けるため、敬称は基本的に「さん」ないし「先生」を使います。
- カメラオンの強制はしません。ただし、お顔が見えている方が話しやすいので、構わない方はカメラオンお願いします。
- ウィトゲンシュタインはひどいミソジニストでした。そうした彼の発言を面白おかしく取り上げることに反対します。

目次

1. 前回のおさらい（と補足）
2. 数学の哲学と「概念形成」
3. 研究者たちの「概念形成」
4. 自己明晰化と「概念形成」revisited
5. 展望：中期から晩期へ

1, 前回のおさらい（と補足）

前回のおさらい

- テクストに対する基本的な構えとして、「読み手オリエンテッドなテクスト観」がどのようなものかについてお話しした
  - 主体が眼前にある文字列から、何を・どのように被っているかを自分に対して明晰にする（自己明晰化する）ことによって有意味なテクストが生成する

自己明晰化とは

- 主体が眼前にある文字列から、何を・どのように被っているかを自分に対して明晰にする（自己明晰化する）とは？

  - 「言葉の意味をめぐる自明性」に疑いを差し向ける

  分節化すなわち「語」（部分）と「文」（全体）とを得ることができ、かつ、部分の意味・使用・役割を決めることができるという考え（cf.『論考』の有意味観を支える考え）

自己明晰化における「疑い」の身分

- 「言葉の意味をめぐる自明性」に疑いを差し向けるとは、否定することではない
  - 当たり前のことができないプリミティブな存在（cf.『探究』6節の、まだ物の名を訊ねられない子ども）は、自明性の「否定」ではない
- むしろ、当たり前のことができるということがどのようなことであるかを見てとりやすくする「比較の対象」（PU 130-1）である

自己明晰化の成果

- 「言葉の意味をめぐる自明性」を、自ら能動的に引き受けていることとして考えることができるようになる、能動的な言葉の使い手（＝主体）となる

- 文字列を有意味なテクストとして取り扱うということを、受動的・無意識的に遂行してしまっていることとみなすのでなく、むしろ、できていることとみなす

受動的な受け手から能動的な主体へ

- プリミティブなステイタスの意義が対照的
- 受動的：プリミティブ＝欠如、未発達
  - 当たり前のことができない状態
- 能動的：プリミティブ＝ラディカル、洗練
  - 当たり前にやっていることをあえて外してみせている、プロ棋士が将棋の角・飛車なしに将棋を打つ、ギターの名手が利き手でない方で演奏するようなこと

自己明晰化したと言えるメルクマールは？

- 必ずしも無意識的にやっていることを「言語化する」でない
- どちらかといえば、「受動から能動へ」は、態度変更の問題であり、一つの場面でできていることを、どのくらい豪華に評価evaluateできるかにかかっている

豪華な評価とは

- 一つの場面でできていることを、ここでは、「最小単位を得る（分節化する）」としてみよう
- 「りんご」を使えるならどんなこともできる
  - 大きい一つのものがあるということと複数のものがあるということを区別できる、カウントができる（基数が得られる）、物同士を区別できる（左右や前後といった位置関係が得られる）、世界から個物を取り出すことができる（関節・接点が得られる）、部分を「全体における部分」としても「全体」としても「全体を創発する部分」としても見ることもできる（文が作れる）

（脱線）

- 12月17日に、時間・偶然研究会で行った発表「最小単位の与え方をめぐる『探究』と『論考』」では、『論考』が、最小単位の与え方について、なぜかわからないけれどそうなっていること（＝所与）として扱っていると論じた
- これは『論考』の、最小単位を与えることに対する受動性と説明できそう。
- 対して『探究』は、最小単位を与えることでで き（てい）ることを豊かに評価しようとしており、『論考』の弱みを克服している。

今日のテーマ

- 「概念形成」について

概念形成とは

- 前回は、極めて簡単に「ウィトゲンシュタインが与えた虚構の人（々）の振る舞い」と断り、具体例を示した（cf.「自分の指でしか数えない人」LW1 212）
- 今日は、概念形成が、自己明晰化を進めていくにあたりいかに大切な試みであるかを、参考文献を交えつつより説得的に述べたい

2, 数学の哲学と「概念形成」

遺稿の箇所

- 「概念形成Begriffsbildung」という言葉が登場する箇所は、それほど多くない

  1. 中期ウィトゲンシュタインの遺稿『数学の基礎』

  2. 晩期ウィトゲンシュタインの遺稿『探究』第二部

中期ウィトゲンシュタイン

何を考えているところか

- 「計算する」「証明する」といった数学の基礎的な営みは、同じことを繰り返していると言われるのか、それとも、その都度ごと異なることをしていると言われるのか
- 前者：かくあらねばならぬという規則に従っている（強い同一性）
  - 「+1」でできることは一つしかない
- 後者：記号レベルでは同じと言えそうなものを取り扱っていても、実はその取り扱い方が変わっている（弱い同一性）
  - 「+1」でできることは今は一つに思えても次は別のことが考えられる

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

経験の限界——それは概念形成である。

「かくあるであろう」から「かくあらねばならぬ」へと、私はいかなる移り行きを行うのか。私は別の概念を形成するのだ。以前には存在しなかったものがその中に含まれている概念を。「これらの導出が同じならば、……でなければならない」と私が言うなら、そのときは何かを同一性の規準にとっているのだ。したがって同一性の概念を改造しているのだ[um|bilden]。

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

　しかしそこである人が次のように言うとしたらどうか。「私にはその二つの過程は自覚されない。私は経験だけを自覚しているので、経験から独立した概念形成や概念改造を自覚してはいない。私には、すべてのものが経験に奉仕しているように思われる。」

　換言すれば、われわれは、あるときにはより理性的になり、あるときにはより理性的でなくなるとか、あるいは、われわれの思考形式を変え、それによってわれわれが「思考」と呼ぶものが変わるとかいうふうには思えない。われわれはいつもわれわれの思考を経験に適合させているだけのように思われる。

『数学の基礎』第二版3-29/第三版4-29

　ある人が、「君がその規則を守るのなら、かくあらねばならない」というときは、その反対物に対応している経験の明確な概念を持っていないことは明らかである。

　あるいはまた、違った事態であるとすればどうみえるであろうか、ということについて、彼が明確な概念をもっていないことは明らかである。そしてこれはたいへん重要なことである。

読解ポイント

- 「概念形成Begriffsbildung」と「概念改造Begriffsumbildung」とがある
- 「概念形成」は、ある一つの記号の使用から、次の使用へと移行することを言っているようである
- スライド20で私が用いた言葉を使ってよいなら、「強い同一性」を得ることを「概念改造」と呼んでいるといえる

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　例えば「君が本当に同じことを二回行うなら、結果も同じでなければならない」とわれわれが語るような仕方で、同一性の概念を形成するようにわれわれを強制するのは何なのか。——何がわれわれを、規則に従って進むように、あるものを規則とみなすように、強制するのか。何がわれわれを、すでに学んだ言語の形式において語り合うよう強制するのか。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　というのも、語「ねばならぬmuß」は、われわれがこの概念から離れられない、（それとも「欲しない」というべきか）ということを確かに表現しているからである。

　実際、私がある概念形成から他のそれに移行しても、旧概念は依然として背景にそのままあるのである。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　私は、「証明は、われわれを一定の決意へ、しかも一定の概念形成を受け入れる決意へと連れて行く」と言えるだろうか？？

　証明は、君を強制する手続きとみなさないで、君を導く手続きとみなせ。––しかもそれは、ある（一定の）事態に対する君のとらえ方を導くのである。

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

しかし証明は、われわれが一致してその影響を受けるように、それぞれを導くのは、どのようにしてか。では、われわれが数を数えるとき一致するのは、どのようにしてか。人はいうかもしれない。「われわれはまさにそのように訓練されているのだ。またそのようにして作り出された一致は、証明によって継続せしめられるのだ。」

『数学の基礎』第二版3-30/第三版4-30

　この証明の過程で、われわれは定規とコンパスによる作図を排除する、角の三等分に対する見方をつくった。

　ある命題を自明として承認することによって、われわれはまた、その命題から経験に対する一切の責任を免除する。

　証明の過程で、われわれの見方が変えられる––また、それが経験と関連するということは、そのことを妨げるものではない。

　われわれの見方が改造されるのだ。

読解ポイント

- ウィトゲンシュタインは、概念改造（強い同一性を設ける）を私たちの見方の変化として、捉えようとする
- 「かくあらねばならぬという規則に従っている」という強制的な描像を被るように思われるときにも、「自分が一定の予想図に従って導かれている」という描像を採用しているのだと考えようとしている
  - 「証明は、君を強制する手続きとみなさないで、君を導く手続きとみなせ。——しかもそれは、ある（一定の）事態に対する君のとらえ方を導くのである。」（RFM 3-30/4-30）

なぜそんなことをするのか？

- 【槇野の解釈】異なる概念形成を与えられるようにするため
  - 「+1」でできることは今は一つに思えても次は別のことが考えられる
  - 注意：「+1」でできること（得られる結果）は一つのことに決まらない、という懐疑的態度ではない。強い同一性をとる「概念改造」も可能であるので、一旦は、結果が一つのことに決まることを認める。その上で、次の移行（「+1」の繰り越し）では別のことをやってもいいはずだという考え。

3, 研究者たちの「概念形成」

どんな文脈で用いられてきた言葉か

- 「概念形成」は、ウィトゲンシュタインの哲学の**ありよう**nature・**方法**methodを語る際に、一部の研究者によって用いられる言葉の一つ

研究者の言い回しの中での位置づけ

- ウィトゲンシュタイン哲学のそもそも何をしようとするかについて、研究者が「ありようnature」を語る言葉
  - 例：「治療Therapie」（治療的解釈）・「文法的考察Grammatical Investigation」（標準的解釈）・「自己明晰化Self-Clarification」（槇野）
- ウィトゲンシュタイン哲学の具体的な「方法method(s)」
  - 例：「比較の対象objects of comparison」・「文法的記述grammatical descriptions」・「概念形成concept-formation」

どんな領域をめぐってか

- 中期ウィトゲンシュタイン（とりわけ数学の哲学）の特徴づけをめぐって
  - Chihara（1963）、岡本（2011）、入江（2014, 2016）
- 後期ウィトゲンシュタインの『探究』の方法をめぐって
  - Rhees（1960）、Hacker（2001）*要注意
- ウィトゲンシュタインと宗教哲学をめぐって
  - Phillips（1993）
- 晩期ウィトゲンシュタインの色彩の哲学をめぐって
  - Gierlinger（2017）

どれに着眼するか

- 自己明晰化を考える（進める）にあたり重要になる立場
  - 中期ウィトゲンシュタイン哲学（『数学の基礎』）を、単なる過渡期ないし未熟な思考とは考えず、後期ウィトゲンシュタイン哲学（『探究』）をより豊かに読むことを可能にする
  - Cf. 岡本（2011）、入江（2016）

入江（2016）の紹介

- 入江俊夫（2016）、「概念形成へのまなざし––ウィトゲンシュタインの言語観と数学の哲学––」、『これからのウィトゲンシュタイン : 刷新と応用のための14篇』、荒畑靖宏・山田圭一・古田徹也編著、リベルタス出版。

入江（2016）の紹介

- 問題意識
  - 「「日々の言語ゲームそれぞれの名状しがたい多様性」へのまなざしは、よく知られているように、後期ウィトゲンシュタインの顕著な特徴をなす。ここで注意を向けたいのは、それとはややずれた側面、すなわち、この「新しいタイプの言語、新しい言語ゲーム」の「新しさ」とは何か、という点である。」（p. 85）

入江（2016）における「概念形成」

「［…］我々は完全に規定された概念をもって言語ゲームを始めるのではなく、ある意味で常に未規定な諸概念を、当座の必要に応じて規定しつつ時間とともに言語を拡張していくのである。このような創発的側面を含め、言語の生成的な相全般を我々は、ウィトゲンシュタイン自身の用いた用語によって「概念形成」と呼ぶ。」（p. 86）

概念形成と言語の創造性

- 何が「創発的側面」や「言語の生成的な相」と言われるのか
  - 「［…］数学的命題とその証明との関係は経験的命題とその検証との関係と全く異なり、命題中の諸概念が証明により新たな**規定**を受け取るという関係にあるということにほかならない。」（p. 88）

概念形成の具体例

- 「定規とコンパスによる角の3等分問題」（pp. 88-91）
  - 定規とコンパスによる角の3等分の不可能性は、ユークリッド幾何学の問題が代数学の問題に翻訳され、解決された
    - 定規とコンパスによる作図操作→2次以下の方程式を解くこと
    - 角の3等分の作図可能性→ある種の3次方程式を解くこと

概念形成の具体例

- 「ある種の3次方程式を解くことと関係付けられた「角の3等分」のこと」を「新しい3等分の観念」と呼ぶ（p. 89）
- 「新しい3等分の観念」は何をもたらすか
  - 「定規とコンパスによって角を3等分できるか否か」という問いが意義を持つ（そこへ埋め込まれる）、「より大きな体系」（p. 91）

概念形成の具体例

- 重要なことは、「解決の主体が両体系[コンパスと定規の体系と、問いに意義を与える「より大きな体系」]を比較し、両者の連関性に気づくこと」（p. 91）であるという

- 「問題解決のためには、もちろん「『コンパスと定規』の体系」だけでは足りないが、「より大きな体系」だけでも足りない。」（p. 91）

- 「新たなアスペクト」（p. 91）

4, 自己明晰化と「概念形成」revisited

入江（2016）はどう問いに答えたか

- 問い「新しいタイプの言語、新しい言語ゲーム」の「新しさ」とは何か？
- （槇野が考える）解答：「新しさ」とは、

①これまでの（古くからの）言語使用を十全に分析することができるようにする何ごとか

②これまでの正しい・適切な言語使用（≒有意味な言語使用）と考えられてきた範囲には入らない使用を考案し、そのような範囲を拡張する何ごとか

自己明晰化からの入江（2016）の分析

- ウィトゲンシュタインの数学の哲学における「概念形成」は、数学における証明が、古い体系のみを有していたときには、予感ないし予測不可能であった、新しい「展望」（cf. PU 122）をもたらすことを示した

- 新しい展望とは、古い体系（「りんご」）の保持（自覚）・見直し（否定）・捉え直し（受け入れ）のステップを可能にするものの見方のこと

5, 展望：中期から晩期へ

晩期ウィトゲンシュタイン

『探究』第二部365節

概念形成が自然に関する事実によって説明できる場合、我々は文法に代えて、自然において文法の基礎となっているものに興味を持つべきではないのだろうか？––たしかに、我々の概念と自然に関する一般的な事実（一般的であるため、たいてい我々の目に止まらないような事実）の対応関係は、我々にとって興味深いものだ。だからといって、我々の興味がここで、概念形成のそうした可能な原因へと後戻りするわけではない。我々は、自然科学を行なっているわけではない。自然誌的研究を行っているわけでもない、–というのも、我々の目的のために、自然誌上の架空の出来事を案出することもあるのだから。

『探究』第二部366節

私は、仮に自然に関するしかじかの事実が別様であったなら、人間は別の概念を持つだろうと（仮説の意味で）言っているのではない。そうではなくて、ある種の概念が絶対に正しく、それと違った概念を持つ人は、我々が理解しているあることを理解していないのだ、と信じる人–そうした人に、極めて一般的な事実が、我々の慣れ親しんでいるものと違っているところを想像してほしいのだ。そうすれば、普通のものとは違う概念の形成が理解できるようになるだろう。

ご清聴ありがとうございました